

建設コンサルタント海外奮闘記 ～ベテラン技術者の挑戦～

国際委員会 藤井 雅之 | FUJII Masayuki

はじめに

現在海外業務に関わっている技術者を紹介する「奮闘記」シリーズ第2回は、国内専属で業務経験を積み、40歳を超えてから初めて海外部門に移籍した3名を紹介したいと思います。

意に添わない異動だったが… (Aさんのケース)

1) 国内部門から海外部門に移った経緯

海外業務への興味も経験も全くありませんでしたが、45歳の時に、突然海外部門へ3年間の異動命令がありました。シールドトンネル設計の経験が見込まれたの依頼でしたが、当時は海外業務に全く興味がなかったことに加え、英語にも自信がなく、どうして私を選ぶのだと、上司に一晩絡んだ覚えがあります。当初3年間の予定でしたが、結局のところ62歳になる現在まで海外業務を続けています。

2) 海外業務を開始して感じた困難

最初のうちは、英語ができる社員に通訳をお願いして現地作業を行っていました。でも少し経つと、ある程度の技術的バックグラウンドを持ったエンジニアと、同じ目的意識を持つことができれば、図面と数字を使って十分意思疎通ができることに気付き、技術面の打合せは、通訳なしで進めるようになりました。ただ、英文書類の読みや英文レポートの作成には本当に苦労しました。最近では翻訳ソフトをうまく活用することで労力を大きく減らせています。

3) 海外業務を担当してよかったと思ったこと

日本社会から出て仕事することは本当に刺激的でした。日本では設計が中心でしたが、海外業務では1つのプロジェクトの計画段階から施工監理にまで関与でき、よい経験が積めてよかったです。現地の物価が安く日本より少し贅沢できたことも魅力でしたが、

最近は何安が進んでその魅力は少し薄れていますね。異動が決まった時は不満でしたが、今では本当に良かったと思っています。

4) 40歳を超えてから海外業務を行う方へのアドバイス

語学が不安な方が多いと思いますが、技術力の裏付けさえあれば、技術面の打合せは何とかなります。英文の読み書きは大変でも、翻訳ソフトの進歩により、ハードルは今後ますます下がると思います。現地で見える世界が大きく広がるので、一緒に仕事する現地スタッフとは、仕事外でも大いに付き合ってほしいと思います。

海外業務にあこがれて (Bさんのケース)

1) 国内部門から海外部門に移った経緯

国内業務中心の会社に勤めていましたが、47歳の時に鉄道分野の海外業務をやっていかうと考え、転職を決断しました。海外プロジェクトを通じて技術的にさらに成長できるチャンスがあると思ったためです。これまでずっと関西在住でしたので、転職に伴い東京への転居が必要になりましたが、長男はすでに大学に進学し、妻は東京転勤の内示を受けていたので、大きな障害はありませんでした。仕事面の不安は大いにありましたが、やれるだけやってみよう、あとは出たとこ勝負だと腹をくくっていました。現在55歳ですが、今も海外業務を続けています。

2) 海外業務を開始して感じた困難

語学以上に、まず仕事ができる体制を現地で構築することが大変でした。国内業務なら、まず組織があって仕事を受けるわけですが、海外プロジェクトでは仕事を受けたあと、組織を現地で構築することになります。これまでに、前職の会社の方や、協力会社の方からの協力を受けてきました。

語学については現地のコンサルタントの社長に、派遣してくれたエンジニアの能力不足を説明する場面で、



(A) 現地の仕事後の一息



(B) 現地での誕生パーティー



(C) 現場宿舎の屋上から

意図がうまく伝わらず大いに怒らせ、関係を一時悪化させたことは苦い思い出です。お互いの真意が分かった後は仲良くなって、その社長とはプロジェクト後も、現地や日本でも機会があれば仲良く食事をします。

海外業務を始めた頃は、TOEICスコアが200点台でした。その後700点台にはなりましたが、今でも英語の勉強は毎日欠かさず続けています。かっこよく話せなくても、正確に意思、情報が伝わるように留意しています。現地スタッフとの付き合いでは、席が離れていてはコミュニケーションが十分に取れないと考え、現地スタッフのど真ん中に自分の席を置き、仕事以外の日常会話からばか話まで参加できるように心がけています。

3) 海外業務を担当してよかったと思ったこと

期待通り複数の大型プロジェクトに従事することができました。各国の設計図書を比較分析し整理する機会を持てたことは、とても刺激的な経験でした。

4) 40歳を超えてから海外業務を行う方へのアドバイス

国内業務を経験した方なら、技術面でのハードルはほとんどないと思います。自分にとって、これまでの国内業務を通して蓄積した経験、人間関係は財産であり、海外業務でも大いに助けとなりました。

英語でのコミュニケーションは気合いで何とかかなると思いますが、やはり語学力は向上させた方がよいと思います。私は無理せず、ゲーム感覚で勉強するように心がけてきました。

国内か海外かにこだわりはなかった (Cさんのケース)

1) 国内部門から海外部門に移った経緯

入社以来国内業務を続けていましたが、41歳の時に海外部門への異動の打診を受けました。もともと海外業務に興味はあったので、抵抗なく異動できました。55歳の現在も海外業務を続けています。

2) 海外業務を開始して感じた困難

英語でのコミュニケーションには苦労しました。対面の打合せならまだよいのですが、オンラインで行うような場合、正確に理解することも、説明することも

容易ではなく、ここは地道に勉強して少しずつ慣れていくしかありませんでした。

海外の業務では、契約書の内容の解釈、現地スタッフの雇用問題の解決、税金対応、治安問題の対応など、技術以外の分野での対応が求められて大変でした。また技術面でも、日本とは地形、気象、自然環境が異なり、日本の技術や慣行をそのまま適用することが難しい場合も多いですが、日本で基礎的な技術を学んだことが財産でしたし、今でも十分に役立っています。

3) 海外業務を担当してよかったと思ったこと

大型のダム建設などは日本では経験できませんので、海外業務でしか経験できないことだったと思います。これまでの日本国内での業務に比べて重い責任を担うことができ、厳しい立場で業務を経験できたこと、海外の有名なエンジニアと協業して知見を広げることができたこと等が良かったことだと思います。

建設業界は他業種に比べると国内だけでも完結できる分野かもしれませんが、海外での経験は視野も広がりますし、貴重な経験ができると思います。

4) 40歳を超えてから海外業務を行う方へのアドバイス

国内海外問わず、確かな技術力がエンジニアの基本であると思います。国内と海外の両方の業務を経験することで技術力の幅も広がると感じています。語学力はチームを率いる立場を担う場合は必須ですが、最終的には高い技術力を有する人が求められると思います。現地スタッフでは対応できない確かな技術サービスを提供できるかが問われてくると思います。

おわりに

海外業務への興味があり、海外業務を担当する機会があっても、語学等が不安で踏ん切りがつかない方は少なくないかもしれません。今回の3人のお話では、現地で求められているものはまず技術力であり、語学は後で乗り切れるものと考えているようです。また、海外業務に興味なかったとしても、やってみれば日本とは違った貴重な経験ができることもあります。機会があれば、ぜひ、海外業務を経験していただきたいと思います。